目　次

はじめに……5

第一部　感謝表現の歴史

第一章　感謝表現研究の先覚者……17
第一節　柳田国男と感謝表現研究（『毎日の言葉』）……17
第二節　新村出と柳田国男……21
第三節　新村出の感謝表現研究と柳田国男の感謝表現研究……28
第四節　『毎日の言葉』における感謝表現についての記述……32
四・一　「オ礼ヲスル」……32
四・二　「有難ウ」……36
四・三　「スミマセン」……39
四・四　「モッタイナイ」……41
第五節　『日葡辞書』における感謝を表す語（表現）……43

第二章　上代・中古のカタジケナシ……51
第一節　カタジケナシの語源……51
第二節　宣命におけるカタジケナシ……62
第三節　宣命におけるミ形「カタジケナミ」（一）……70
第四節　宣命におけるミ形「カタジケナミ」（二）……77
第五節　平安朝物語のカタジケナシ……84
第六節　カタジケナシとカシコシ……92
第三章　中世の感謝表現……101
第一節　和漢混淆文における感謝表現……101
第二節　漢語系感謝表現の源流……109
第三節　狂言の感謝表現……125
第四節　狂言における上からの申し出に対する表現……145
第四章　近世前期の感謝表現……159
第一節　アリガタイの登場……159
第二節　『男色大鑑』におけるカタジケナイ……169
第三節　近松作品におけるアリガタイ……173
第四節　上から下への感謝表現クヮブンの確立……180
第五節　カタジケナイの双方向性……184

第五章　近世後期から近現代にかけての感謝表現……191
第一節　江戸でのアリガタイの浸透……191
第二節　江戸でのオオキニの誕生……198
第三節　京におけるダンダン……208
第四節　京におけるオオキニ……211
第五節　配慮を伴った感謝表現……218
第六節　スミマセンにおける謝罪表現化並びに感謝表現化……227
第七節　ドウモについて……236
第八節　サトウの『会話篇』におけるドウモなどの言いさし表現……244
第九節　ドウモと挨拶表現……255

第二部　「冥加」系感謝表現とその周辺

第一章　ミョウガナイ（冥加ない）をめぐって……265
第一節　ミョウガナイ（冥加ない）のナイについて……265
第二節　ミョウガナイの二義性……272
第三節　②の用例に対する注釈書での扱い……279
第四節　ナシ（ナイ）の正体……282
第五節　辞書における①の用例について……288

第六節　辞書における②の他の用例について……291
第七節　解釈の揺れについて……304
第二章　モッタイナシ（勿体なし）について……311
第一節　モッタイナシ（勿体なし）とシャウダイナシ（正体なし）……311
第二節　モッタイナシの意味と表記……326
第三章　近世前期におけるミョウガ（冥加）に関わる表現……337
第四章　ミョウリニツキル（冥利に尽きる）の意味変化……363
付章　別れの挨拶表現の成立とシステム変化……379
おわりに　感謝表現の歴史と方言の分布……401
参考文献……407
本書の基盤となっている論考……415
あとがき……417

はじめに

挨拶は、人間関係を円滑に進める上で重要な言語行動である。本書で取り扱っていく感謝もその挨拶の一つである。感謝の表現に興味を持ったのは、現代という共時態において、アリガトウの他にも、スミマセン、モッタイナイ、オソレイリマス、ドウモなど、様々な表現が併用されていることにある。これは、他の語における語形交替とは大きく異なっている。語の交替は、一般的には新旧による語形の交替である。すなわち、新しい語形が取り入れられると、古い語形は消滅していくのである。感謝表現においては、古いものがそのまま使い続けられていることも稀ではなく、また「すみまでんでした、ありがとうございます」のように、複数の感謝表現が同時に使用されることも多い。感謝表現において古い語形が残存して併用されているのは、後に述べる感謝についての考え方、すなわち感謝の発想法が変化していることによる。ただし、その変化は、以前の発想法にとって替わるような大きな変化ではなく、これまでの感謝の発想法を基盤にして、そこに更に新しい発想法が積み重なっているのである。つまり、日本における感謝というものの幅が広がったのである。感謝に対する考え方が広がれば、感謝が様々な場合において行われるようになる。そのため、一つの感謝表現では、それらをカバーできなかったり、また相手に対して感謝の意を十分に尽くせなかったりする。そのことによって、現在では様々な表現が使い分けられているのである。例えば、一番新しい発想法によるスミマセンについて言えば、それを使用するとおかしく感じられる場合があるし、感謝表現としてスミマセンが使用できない状況も存在する。そのような時には、人々は他の表現を用いて感謝を表しているのである。

感謝表現を歴史的に眺めていくと、カタジケナシ、ミョウガナイ、モッタイナイ、アリガタイ、スミマセンなどは、単純語ではなさそうである。つまり、複数の形態素によって形成されている合成語である。また、それらの語構成に

おいては、ナシ（無シ）、カタイ（難い）、ン（ん）といった、打消や否定的な意味を持つ形態素が結合している。これらの点から、感謝表現として使用されている語は、もともとは感謝表現として生み出されてきたものではなく、既存の語が用法を変えて感謝の意を表すようになったものだと言えよう。それも良い意味の語ではなさそうである。それらの語は、柳田国男が述べているように、「相手方には、こちらが非常に悦んで居るといふ意味に取られる言葉でも、それ自身を単独で聴いて、ちつとも有難くないものがよく用ゐられて居る」（『毎日の言葉』「モッタイナイ」）のが感謝表現なのである。相手の厚意に対してその語が使用されていくうちに、それが慣用化して感謝表現として定着したのである。つまり、語用論的なものなのである。

感謝表現を共時的に眺めていくと、ある時代には同じような意味を原義として持つ感謝表現が併用されていることがわかる。わかりやすく説明すると、現代においてスミマセンと同じような感謝の意味用法を持つ表現としては、ワルイ（ネ）、ゴメン（ネ）、モウシワケナイなどがある。これらはいずれも謝罪的な用法を持つ語である。このように、時代時代によって感謝の発想法が変化しているのである。そのような感謝表現の発想法の変化の変遷を辿るのが本書の目的である。それによって、日本人の感謝に対するあり方についての歴史的な変化が明らかになってこよう。

先に、本書における第一部についての結論的なことを図示しておく。

感謝表現の大まかな変遷

古代　　中世後期　　近世後期

〈発想法〉　困惑・恐縮　批評・評価　配慮・気遣い
〈代表的な表現〉　カタジケナシ　アリガタイ　スミマセン
〈システム〉　下からの単一方向　双方向　その場での立場
（発想法の共通の基盤に〈困惑・恐縮〉がある）

感謝表現の歴史を見ていくと、カタジケナシからアリガタイへ、そしてアリガタイからスミマセンへといった大きな流れがある。カタジケナシのもともとの意味は、「恥ずかしい」である。カタジケナシの使用が主であった時代の感謝は、相手側からの厚意に対して話し手側が恥ずかしさを示すことであった。つまり、〈困惑・恐縮〉による発想である。

その次のアリガタイは、漢字で「有難い」と書くように、有ることがむずかしい、すなわちめったにないという意味である。それを用いて相手に感謝をするのであるから、相手からの厚意に対する〈批評・評価〉と言えよう。

そして、一番新しいスミマセンは謝罪表現としても使用される。スミマセンは感謝表現というより謝罪表現だという意識の方が強い。スミマセンは「すむ」（「澄む・済む」）の否定の丁寧形である。謝罪表現や感謝表現になる以前の意味は、ある物事がうまくいかないために、自分の心が晴れ晴れしない、気が治まらないということであった。謝罪の場合であれば、ある物事がある人に対して迷惑をかけている（かける）ために、自分の気持ちが治まらないことを表明することであった。一方感謝の場合は、謝罪の用法を基にしており、相手からの厚意に対して、自分が相手に迷惑や負担をかけていると意識している。すなわち、そこには相手に対しての〈配慮・気遣い〉が存在しているのである。

アリガトウが「めったにない」という〈批評・評価〉の発想によるものだといっても、自分には不相応であるという〈困惑・恐縮〉に基づいた上での〈批評・評価〉である。同様に、スミマセンにおいても「心がすまない」という〈困惑〉に基づいた上での〈配慮・気遣い〉である。感謝表現は相手との身分関係やその場での立場が関わっているのであるから、そこには相手への〈恐縮〉や、相手からの厚意に対する〈困惑〉が存在している。つまり日本における感謝は、どの時代においても、話者による〈困惑・恐縮〉という意識によってなされているのである。

先に述べたように、感謝表現はもともと感謝のために生み出されたものではない。したがって、同じような意味を持つ語はその時代の感謝の発想法に基づいて、感謝の意を表すようになり、感謝表現として活用されていくことになる。その結果として、多くの感謝表現が形成されたり、また地方によって異なる表現が感謝表現として定着したりしているのである。

現代ではスミマセンが一般的であるが、スミマセンを感謝表現として使用することに違和感を抱く人もいる。しかし、江戸時代末期や明治時代の資料を眺めていると、既に謝罪と感謝の両用法において使用されていることがわかる。スミマセンばかりでなく、カタジケナシにしても、また第二部で詳しく扱っていくミョウガナイにしても、感謝の用法以外に謝罪（お詫び）的な用法も共存していたのである。

しかし、感謝と謝罪とはあくまでも使用される場面が明確に異なっている。両者の違いは次のように説明されよう。

感謝とは、話し手側に対しての相手側の厚意ある行為に対するものである。

謝罪とは、相手側に対しての話し手側の良くない行為に対するものである。

すなわち、感謝と謝罪とにおいてはその問題になっている行為の出所が異なるのである。相手側から話し手側へであれば感謝であり、話し手側から相手側へであれば謝罪である。スミマセンに対しては謝罪表現という意識があるこ